

大阪方言における命令表現について

—臨地調査と文献資料比較—

村 中 淑 子

1 はじめに

大阪方言において、「命令」の意図を表現するために使われる形式はさまざまであるが、もっとも単純な形をみると、2通りある。たとえば、「読む」ことを命令する場合のヨメとヨミである。それは従来、「命令形命令法」「連用形命令法」と呼ばれていたが（島田勇雄1944、前田勇1961等）、本稿においては、郡史郎1997の呼び方にならって、「強い命令」「柔らかない命令」と呼ぶことにする^{注1}。というのは、五段動詞においてはヨメ・ヨミの形になり、「命令形」「連用形」の名前に合致するが、一段動詞においてはたとえば「起きる」ことを命令する場合、オキ↓・オキ^ーの対立がそれにあたり、「命令形」「連用形」の名前はそぐわないからである（↓は下降音調を示す）。一段動詞では語形が同じで、下降音調の有る無しのみで対立するのである^{注2}。

以下、本稿では、大阪方言における「強い命令」「柔らかない命令」とそれに文末助詞の後続した形を中心に、2種類の調査をおこなった結果について述べていく。考察の際に、文献資料との比較もおこなう（ただし1940年代以降のもの、かつ、書かれた当時の大阪方言について記述してあるものに限定）。

2 命令表現の使用の実態

2-1 調査概要

1998年9月に東大阪市内で待遇表現に関する調査をおこなった。その中の命令表現に関する部分について概要を述べる。「選択式質問調査」と「会話作成調査」の2種類である。

選択式質問調査について

話者への指示：

「読め」「読みなさい」のように、人に命令するとき、次のどの言い方をしますか（カードに書かれた選択肢の中から、話者がふだん使うものを選んでもらい、印を付ける）。では、ご自分のお使いになるものについて、発音してみてください（録音する）。

選択肢：

ヨメ ヨミ ヨミヤ ヨミーヤ ヨミーナ ヨマンカ ヨマンカイナ ヨマンカイヤ

注1 郡1997では後者を「ソフトな命令」と呼んでいる。

注2 五段動詞と一段動詞でそのような違いがあることについては、郡1997以前の多くの文献でもふれられている。

ヨミヤガレ ヨミサラセ ヨミクサレ ヨミンカ ヨミナハレ
オヨミナハラシカ オヨミヤハラシカ ヨンデクレハレヘンカ ヨミナサイ

会話作成調査について

この調査の方法については、村中2000・同2001に詳しいが、ここでも簡単に述べておく。次の内容のカードを話者に提示し、そのような状況で自分がふだん使っていると思われるセリフ、および相手を使いそうと思われるセリフを作って書き出してもらい、関西出身の調査員と掛け合いで発音してもらおう。状況は「相手の家を訪ねて、話し込んだあと、帰り際の会話」という設定である。

話し相手（場面）としては、「同性の親しい友人」と「中学校の恩師」を設定した。すなわち、「親しい同年配の同性」と「親しい目上」の2通りの場面である。話者の作ったせりふにそって、「あなた」役と「友達」役あるいは「恩師」役を、話者と調査員が交代で演じ、話者の発話した部分を資料として用いた。

《話者に提示したカード内容》

- | | | |
|-------|-----------------------------|---|
| あなた | ：「自分は帰る」という意思を告げる | ① |
| 友達／恩師 | ：引き留めて、夕食を食べていくように勧める | ② |
| あなた | ：「時間が遅いのでやはり帰る」という意思を告げる | ③ |
| 友達／恩師 | ：雨が降っていることを教える | ④ |
| | 傘を貸そうかあるいはタクシーを呼ぼうかという提案をする | ⑤ |
| あなた | ：タクシーを呼んでくれるよう頼む | ⑥ |
| 友達／恩師 | ：少し待つようにと言う | ⑦ |

上の内容の、②の「引き留めて、夕食を食べていくように勧める」の部分から得られた会話データを、「命令表現」にかかわるものとして、ここでの分析対象とする^{注3}。

2種類の調査の意図

「選択式質問調査」では、話者は自分が使いそうだと思う語形をいくつでも選べる。選択肢の数が17という限定はあるが、各話者が持っているバリエーションの様相、使いうる範囲というものがある程度わかるはずである。17の選択肢の内訳は、「強い命令」とそれに類するものが4つ、「柔らかい命令」とそれに類するものが5つ、卑属表現的なものが3つ、丁寧な文体のものが5つ、の計17である。

「会話作成調査」では、ある限定された場面にふさわしいものとして1つだけ、選ばれた語形のデータが得られる。話者へ提示したことは「引き留めて、夕食を食べていくように勧める」である。「勧める」となっているが、帰ろうとする相手を「引き留めて」、その後「勧

注3 ②④⑤⑦は「恩師」の立場に立った会話と「友達」の立場に立った会話との2種類のデータがあるが、ここで用いるのは、友達の立場に立ったもののみである。友達といっても、「同郷」で「同年配」かつ「同性の親しい友人」であるから、話者本人の話し方（すなわち①③⑥で得られたデータ）と同質のものともみなす。

める」のであるから、何かを軽く勧めるのとは異なり、相手の行動に強く干渉することばかり出てくるはずであり、「命令表現」としてふさわしいものが出現するであろう。

話者について

選択式質問調査と会話作成調査の話者は、同一である。その人数と内訳は次の通り。

年齢	20～29	30～39	40～49	50～59	60～	計
男	1	7	4	7	4	23
女	5	10	3	8	4	30
計	6	17	7	15	8	53

全員が東大阪市内の生え抜きである^{注4}。年齢は、調査をおこなった1998年度の末を基準とした。後に掲げる表1、表2における話者の年齢についても同様である。

2-2 結果と考察

2-2-1 選択式質問調査について

それぞれの話者がそれぞれの語形を「使うかどうか」を一覧表にしたものが、表1（論文末部に掲げた）である^{注5}。話者の性別で上下に分割し、それぞれ年齢順に並べた。使うという回答の場合に、数字が入れている。数字は、話者が発音したその語形のアクセント核の有無あるいは位置を示す。使用の分布によって、次のa～gのように分けることができる。

a 年代男女に関わらず広く使われるもの

ヨミ ヨミヤ ヨミーナ ヨマンカイナ ヨミナサイ

b 男性は広く、女性は中年層以下にかたよっているもの

ヨミーヤ

c 男性は広く、女性は高年齢層寄りのもの（男女で音調が異なる傾向）

ヨミンカ

d 男性語寄りのもの（女性も一部使うが、音調が異なる）

ヨメ ヨマンカ

e ほぼ男性語とみなせるもの

ヨマンカイヤ ヨミヤガレ ヨミサラセ ヨミクサレ

f 使用者がやや高年齢層寄りのもの

ヨミナハレ ヨンデクレハレヘンカ

g 全く使われていないもの

オヨミナハラシカ オヨミヤハラシカ

注4 山本俊治1961によれば、ふつう「大阪方言」といった際には、摂津方言（大阪市を中心として豊中市・箕面市・池田市・吹田市西南部の地域）をその母胎としていわれている、とのことであり、東大阪市は大阪方言の中でも中北河内方言の地域に属するということであるが、ここで扱う命令表現の形式と音調についてはとりあえずほぼ同じものと見なし、この調査結果を「大阪方言」として扱うこととする。

注5 オヨミナハラシカとオヨミヤハラシカについては使用者がゼロであったので、表に示さなかった。

この結果をみると、「柔らかい命令」および「柔らかい命令に(柔らかいニュアンスを持つ)文末助詞が後続したもの」は、年代・男女に関わらず広く使われる傾向のあることがわかる。ヨミ・ヨミヤ・ヨミーナがそうである。

ヨミーヤ・ヨミンカも「柔らかい命令に文末助詞の類が後続したもの」であるが、男女差がある。いずれも男性には比較的広く使われているが、女性の使用に年代差がみられる。

ヨミーヤのような「柔らかい命令にイヤのついた形」については、郡1997に「イキーヤ」が挙げられ、「若年層中心」とあるが、今回の調査の結果をみると、男性は老年から若年まで使うと答え、女性は中年層以下が使うと答えている。郡1997に先立つ文献である島田1944、前田1949・1961、和田実1961、山本俊治1955・1957・1961・1962・1965・1982にはこの形についての記述がみられないことから、大阪においては比較的新しく使われるようになったものとみてよいだろう^{注6}。男性が先に使い始め、女性が後から使うようになったものであろう。

ヨミンカのような「連用形にンカのついた形」については、前田1949では女性語、前田1961では男女共用とされている。島田1944ではこれの男女差については言及がないが、「行かんか」よりも「行きんか」のほうが「おだやかな言葉附である」と書かれている。山本1957中の文例「ゴハントベテカラフクキインカ」は母親から幼児へのことばとなっている。これらの記述と今回の調査の結果から解釈すると、この形はもともと女性語であったが、古く感じられるようになり、中年層以下の女性は使わなくなったものであろう。男性が広く使っているのは、男性語寄りの語形であるヨマンカとの類似性に引きずられて、残っているのではないか。その根拠として、ヨミンカの音調が挙げられる。女性は全員、下降が無いが、男性は下降有り無しが半数ずつである。おそらく、ヨミンカの音調はもともと下降がなかったものと思われ^{注7}、下降のあるヨマンカと対立していたものと思われるが(ヨマンカ・ヨミンカの意味的対立は、ヨメ・ヨミの対立、すなわち強い命令・柔らかい命令の対立と並行するものであることが、島田1944で示唆され、前田1961では図示されている)、男性はヨミンカを取り入れる際にヨマンカからの類推が働いて同じ音調にした話者がおり、ヨミンカ・ヨマンカの

注6 山本1957にはナカヨクシーヤという文例があるが、これはシにイヤがついたのではなくシー(柔らかい命令)にヤのついたものでしょう。山本の記述もそれを裏付けている。山本1961の末部の付録「方言文例」の中に、「雨が降っているから傘を差して行きなさいよ」を大阪内の各地の話者に方言訳させたものがあり、摂津方言の「行きなさいよ」に当たる部分で、「イキ・イキー・イキナハレ」の下に「ヤ・ナ」が並べて書いてある。これはイキーヤの存在を示しているものとも考えられるが、通信調査であるためか特に説明は加えられておらず、詳細は不明である。また、和田1961にはイ・イナ・イヤが文末の「カ・ンカ・ヤンカ・ナ・テ・ト・ガ・ワ」に添えてニュアンスを加える。イナはまた種々の文節に「つく」とあり、「取ッテエナ・何オイナ」の例が挙げられている。しかし、イヤがついた具体的文例はなく、また柔らかい命令の形にイヤが後続するという記述はない。このように、大阪方言においては「柔らかい命令」にイヤの後続したかたちについての資料は見つけにくいのだが、清瀬良一1957によれば、神戸方言では「はよ行きーヤ」の形が使われていたという。木川行史1991によると、同じ兵庫県でも西脇市方言では行キーヤはなく、行キンカイヤは不自然とされ、行カンカイヤがある。命令表現以外でも行コイヤ、ドコイヤのようにイヤが使われるが、男性語的な強い言い方であるようだ。

注7 山本1957の文例はゴハントベテカラフクキインカという音調が付してあり、やはり下降がないようである。

対立がやや曖昧になってきているのであろう。

ここで、ヨミ・ヨミーナ・ヨミーヤと、ヨマンカ・ヨマンカイナ・ヨマンカイヤを比較し、イナとイヤについて考えてみよう。いずれも○、○+イナ、○+イヤの形であるが、使用分布に違いがある。前者の、ヨミ・ヨミーナは広く使われ、ヨミーヤも高年齢層女性を除けば広く使われている。後者についてみると、ヨマンカイナは男女年代問わず広く使われているが、ヨマンカは男性語寄り、ヨマンカイヤはほぼ男性語である。

ヨマンカは前田1949では男性語とされており、前田1961では男女共用とされている。また、この形は「強い命令」に反語的な「ンカ」がついたものである。つまり、ヨマンカは「強い命令」の上に、さらに相手に対して強く迫るニュアンスを添えたものである。今回の調査でも男性語寄りという結果が出たのであろう。ところが、それにイナをつけた形は、女性も大半が使うと答えた。つまり、イナは、強いニュアンスのものを圧倒的に柔らかくする働きを持っているようである。ヨミの場合のはともと「柔らかい命令」なので、イナがついたヨミーナも使用分布は変わらないのであろう。

イヤについてはどうであろうか。男性語寄りのヨマンカに後続して、ほぼ男性語とみなせるヨマンカイヤになるということは、イヤはやや乱暴な響きを添えるものと考えてよいのではないか。前田1961では、動詞「言う」で命令の形の例が挙げてあり、「イイ、イイーナ」「イワンカ、イワンカイ、イワンカイナ、イワンカイヤ」「イインカ、イインカイ、イインカイナ」「ユーテ、ユーテーナ」「ユーテンカ、ユーテンカイナ」等がある。これらを見ると、少なくとも前田1961によれば、イナはさまざまな命令の形式の後につくが、イヤはイワンカの後にのみ、つく。しかも、これらの中ではイワンカイヤだけが「男専用(卑)」とされている。他のものは「男女共用」とされている。つまり、前田1961の時点で、イヤはそれ自体乱暴な響きを持つだけでなく、柔らかいニュアンスの命令形式の後にはつかなかったようである。前田1961以外の文献をみても、イヤのつく形は、大阪方言として挙げられた例があまりなく、注6で述べた通りである。おそらく、40年ほど前まで、大阪方言の命令表現においては、イヤはイナほどには使われていなかったであろう。しかし、今回の調査結果をみてわかるように、現在、「未然形+ンカ+イヤ」だけでなく、「柔らかい命令+イヤ」の形がよく使われている。今回の調査項目には入れていないが、テ形にイヤのついた命令表現(読ンデーヤなど)も、しばしば聞かれる。文末のイヤは、乱暴な響きを保ちつつ、柔らかいニュアンスのもの後にも付くようになり、大阪方言においては使用が広まってきているといえよう。

「強い命令」であるヨメは男性には広く使われているが(中には「絶対に使わない」と答えた男性話者もいたが)、女性は20代の一部が使うと答えている。この「強い命令」は、前田1949では「男子用」の命令形とされており、「若しも大阪女にして「上れ」だの「飲め」「待て」だの云ったとするならば、それは男か鬼のやうな女であらう」とまで書かれているのだが、それから12年後の同じ筆者による前田1961では、「男女共用」とされている。時代の流れとともに、「強い命令」を女性が使うことへの抵抗感が減ったのであろうか。今回の調査で30代以上の女性が使わないと答えていることについては、2通りの解釈ができる。1つの解釈は、1960年代以前に生まれた女性は「強い命令」の形を使わないということである。もう1つの解釈は、1960年代以前に生まれた女性も10代・20代のころには「強い命令」を使っ

ていたのだが、年をとるにつれて使わなくなった、ということである。筆者の身の回りの観察からは、後の解釈の方が妥当なように思われる。

さて、次に、ヨメ・ヨマンカ・ヨミンカにおける音調が2通り出現したことについて考えてみよう。今回の調査の結果をみると、ヨメ・ヨマンカについては、男性は下降有り、女性は下降無し、である。ヨミンカについては先にも述べたとおり、女性は下降無し、男性は下降有りとしが半数ずつである。いずれも、「下降有り」の場合は、最後拍の拍内下降である。すなわち、メあるいはカの発音の直後に下降が起こる（メあるいはカの母音がやや長くなる）。現在の大阪方言における命令表現では、「最後拍の拍内下降」は、相手に対して強く迫るニュアンスをもつとあってよいと思われる。女性は下降しない形を使うことにより、語形の持つ強さをいくぶんかやわらげているのではないか。文献をみると、前田1949では動詞「買う」で例が挙げられ、カワンカ（男）、カインカ（女）と音調が付してある。すなわち、それぞれの語形の中では下降の有無の対立がなく、未然形にンカがつくか、連用形にンカがつくか、という語形の違いと下降の有無とが結びついている（しかも下降の位置が文末助詞カの直前であるが、これについては後述）。ところが、同じ筆者の前田1961では、イワンカ男女共用、イインカ男女共用、という音調が付してある^{注8}。すなわち、「未然形+ンカ」には以前は下降があり、男性語であったが、その後、「未然形+ンカ」が男女共用となるとともに下降が無くなった、と推測できる。「連用形+ンカ」は女性語から男女共用になったが、下降は無いままである。つまり、「未然形+ンカ」と「連用形+ンカ」において、下降音調は男性専用語の指標であるといつてよいのではないか。これは、今回の調査の結果とも結びつく。今回の調査では、一語形につき一音調という対応関係ではなく、その点では前田の記述と異なるが、「下降有り」が男性語という点では同じである。

下降の位置についてであるが、今回の調査と前田1949とを比較した限りでは、以前はカの直前で下降が起きていたものが、その後、カの直後へと下降が移動したようである。前田以外の文献にこの2つの語形の音調についての記述が無いため、下降の移動の様相についての詳細があきらかでない。ただ、参考になるものとして、村中・郡1990がある。その中の調査では、強い否定を表すカ（たとえば、腹を立てて「こんなとこで勉強なんかできるか！」と言う場合など）の音調が、大阪では高接下降、京都では低接、という結果が出た。すなわち、大阪においては「勉強なんかデキルカー」、京都では「勉強なんかデキルカ」という音調が得られた。これは、命令表現以外でも、「現在の大阪方言において、相手に強く迫る場合には、カの直後で下降が起きる」ということを示すものである。京都ではカの直前に下降が起きていることから、命令表現においてもあるいは音調の地域差があるかと思われるが、明らかでない。「時代的変化でカの直前から直後へと下降が移動した」という現象が、あるいは大阪においてのみ起きたもので、京都には及んでいないという可能性が考えられるが、現時点で

注8 郡1997では、「イカンカ（一）」が挙げられている。これはイカンカの音調に下降のあるものと無いものがあり、下降がある場合はその位置がカの直後であることを表しているものと思われる。（一）の有る無し、すなわち下降の有る無しについての男女差・年代差等の説明は無い。また、イキンカについては言及無し。下降の位置が文末助詞カの直後であるのは、今回の調査の結果と同様である。

は何とも言えない。近在の方言で語形・用法が類似していても、音調には細かな地域差があるようである^{注9}。

さて、次の項目へ進む。ヨミヤガレ・ヨミサラセ・ヨミクスレを使うと答えたのは男性のみであり、しかも男性全員ではなく一部にとどまっている。相当に乱暴なニュアンスを持つものであり、罵り表現としての性質を持つので、使用に個人差があるのであろう。

ヨミナハレは使用者がやや高年層寄りである。これの共通語訛ともいえるヨミナサイの分布とあわせてみると、高年層話者は、ヨミナハレとヨミナサイとを併用している話者が多いが、中年層以下の話者においては、ヨミナサイに置き換わりつつある。しかし、中年層以下でも使用すると回答している話者が少数であるが見られ、死語であるとは言えない。山本1965には、「中年層以上にあつては『一ナハレ』（時にナーレ）、女子学生のこばにあつては『一ナサイ』」とある。山本1965の調査の対象となった女子学生の年代は、今回調査の時点では50代後半くらいであるが、山本1965の女子学生は摂津方言の生え抜きに絞ってあるので、東大阪との違いが生じているのかもしれない。田辺聖子1985にも、ナハレは「現代は中年以下、若年層の間では特別な条件の人を除いてほとんど使わない死語である」とあるが、ナハレはまだ、意外にしぶとく残っているようである。

ヨンデクレハレヘンカも使用者がやや高年層寄りである。おそらく、中年層以下においてはヨンデクレマセンカという共通語形に置き換わっているものと考えられる^{注10}。オヨミナハラシカ、オヨミヤハラシカ、に至っては使用者がゼロであった。丁寧な命令においては、丁寧でない形（上に述べた「強い命令」「柔らかい命令」等）に比べれば、方言形が残りにくいのもかもしれない。

前田1949にもあるように、大阪方言では、もともと、丁寧な形の命令表現が乏しく、その点では京都方言と全く異なる^{注11}。

2-2-2 会話作成調査について

「(同年輩で同郷の友人に対して)夕食を食べていくように勧める」の部分に出てきた命令表現を示したものが表2である。表1と同様、話者の性別で上下に分割し、それぞれ年齢順に並べた。使うという回答の場合に、黒丸が入れている。

注9 木川行央1991によれば、兵庫県西脇市方言における命令表現の中にも、行カンカ・行キンカの形があり、その待遇価は大阪方言の場合と同様であるようだが、その音調は、両形ともにカの直前で下降するようである。

注10 ヨンデクレハリマセンカのように、デスマス体でハルのついた形ならば使うという回答の得られた可能性はある。あるいは、ヨンデクレハレヘンのように、文末のカの無い形であればどうだったろうか。いずれも、調査項目に加えるべきであった。

注11 榎垣実1946には京都の丁寧な命令表現として動詞「する」の形を例に取り、「オシ、オシーナ、オシナカ、オシナカイナ、シナハイ、シナハイナ、オシナハイ、オシナハイナ、オシナハンカ、オシナハンカイナ、オシヤス、オシヤスナ、オシヤハンカ、オシヤハンカイナ、シトクレヤス、シトクレヤスナ、オシヤシトクレヤス、シテクレハラシマヘンカ、シトクレヤサシマヘンカ」などの豊富なバリエーションが挙げられている。前田1949では、「大阪はほとんど『なはれ』の一本槍である」「従って特に丁寧に云ふ必要のある際は京都弁を借用する」と書かれている。

この表では、各話者の発話を、末部に現れた動詞がどのような形になっているかを基準にして分類している。たとえば、70歳の男性話者の発話は、「もうじきにできるさかいに夕食でも食べていったらどうや」であった。この場合、末部の動詞は「食べていく」であり、タラとドーが使われているので、「タラ+疑問類」の中に入れてある。「タラ+疑問類」の中には、「ご飯食べていったら？」なども含めてある。すなわち、最後部の疑問上昇の音調も「疑問類」として扱っている。「タラ+断定」の例は「食べていったらええがな」である。「命令形」は「食べて帰れ」、「命令形+ヤ」は「くていけや」などを表す。「その他」は1例だけであるが、具体的発話は「いや、まだええやないの、夕御飯作るわ」というものである。相手の動作を示す語がないものはこれだけであったので、「その他」とした。また、黒丸が2つついているのは、命令表現が2回出現したものである。たとえば、65才の男性話者からは、「ユックリセーヤー、メシデモクテーキヤー」という発話を得たので、「命令形+ヤ」のところに黒丸が2つつけてある。

さて、表2の分布をみると、次のことが言える。

「強い命令」は男性話者にしか現れない。「強い命令」において、文末助詞のない「命令形」はほとんど現れず、文末助詞ヤの後続した形が多い。これは、文末助詞をつけることにより、言い捨てるのではなく相手に呼びかける調子が加わるからであろう。しかし、山本1957では、大阪方言においては、強い命令にはヤが後続しないとしており、もしそのような言い方をすれば、在来的な言い方とは言えない、という。山本1962では、強い命令にヤが後続する形は、北摂・泉北あたりで聞かれ、「おい」・「こら」相当のぞんざいな言い方、と書かれてあり、山本1982でも同様の記述がある。前田1949でも、文末のヤは柔らかない命令に後続するものしか挙げていない。東大阪でおこなった今回の調査では、男性の約4分の1がこの形を回答したが、それは「会話作成調査」においての出現率であり、もし「選択式質問調査」にヨメヤを入れておけばもっと多くの回答が得られたかもしれない。これは大阪内の地域差であろうか。それとも時代を経て、強い命令にヤを後続する形が使われるようになったのであろうか。今後の調査を要するところである。

「柔らかない命令」は男女ともに、約半数の話者に現れている。やはり、何らかの文末助詞のついた形がほとんどである。ヤよりもイナ・イヤが多いのは、帰ろうとしている相手を引き留めてご飯を食べていくように勤める場面であるため、ヤでは勤めの度合いが少し弱く、強く促す意味を持つイナ・イヤが使われやすいのであろう。男性の場合はイナとイヤの分布に違いがあまり見られないが、女性の場合は、明瞭な年代差がある。すなわち、50代以上の女性はイナ、40代以下の女性はイヤを使っている。このイナ・イヤの使用の分布は、先の「選択式質問調査」の結果とも符合する。

ほかに男女差として挙げられるのは、女性にテの類、タラの類、疑問の類が多いことである。テの類というのは、命令というよりはむしろ相手に何かを依頼する形式である。タラの類は、「～したらいかがであるか」と相手に提案する形式である。疑問の類は、「～しないか？」と相手を誘っている形式である。つまりこれらはいずれも、一方的に強く「命ずる」のではなく、相手が何かの行動をとることを、柔らかなニュアンスで持ちかける形式である。いわ

ば、相手に一步譲ったかたちのものである(ただし、あくまでも形の上でそうであるということであって、語気や声音によっては、タラ類や疑問類も、相手に与える圧力は相当に強くなり得る)。

年代差としては、男性において、「強い命令」は40代以上にのみ現れていることが挙げられる。30代以下はすべて「柔らかい命令」を用いている。女性においては、先も挙げたように、50代以上がイナ、40代以下がイヤを用いていることと、50代以上のほうがタラの類、疑問の類を多く用いていることが挙げられる。これらのことから、男性は若い世代の方が柔らかいニュアンスのものを用いるが、女性は若い世代の方がやや強いニュアンスのものを用いる、とも言えそうである。結果として、若い世代においては男女差が縮まっているといえよう。

3 まとめ

2種類の調査の結果から、大阪方言における命令表現について次のことが明らかになった。

「柔らかい命令」は女性専用語ではなく、老若男女が使うこと。これは従来からも言われていたが、実態を明瞭に示すことができた。

文末助詞イナとイヤの使用分布と待遇価。特に「柔らかい命令+イヤ」の広がりについては、今まで明らかにされていなかったことである。

「連用形+ンカ」と「未然形+ンカ」の使用分布と時代差。下降音調の有無と待遇価、下降の位置の移動。「強い命令+ヤ」の広がり可能性。これらも従来あまりふれられていなかったことと思われる。

若い世代における男女差の減少。ただし、語形の点では「強いニュアンスを持つ文末助詞イヤ」の使用と「強い命令」の使用など、女性が男性に近づいているが、音調の点では、女性は「強い命令」あるいは「～ンカ」の形で下降音調を使わない、という差異がある。

4 おわりに 一問題点と今後の課題一

本稿の分析においては、何らかの形式において「男性対女性」という対立した分布がある場合、男性が多く使用するほうを、「強い・きつい・やや乱暴な」もの、女性が多く使用するほうを「柔らかい・優しい・やや丁寧な」もの、として解釈した。ほぼ妥当なやり方であろうと思われるが、十分な注意が必要である。

調査における反省点としては、「選択式質問調査」での語形をもっと増やすべきだったということがある。「強い命令」に文末助詞ヤのついたヨメヤ、「柔らかい命令」に文末助詞ナのついたヨミナ、あるいは双方に文末助詞ヨのついたヨメヨ、ヨミヨ、なども調べておくとよかったであろう(しかし、あまり選択肢を増やしすぎると話者の内省能力がパンクしてしまう恐れもある)。語形の使用・不使用を尋ねるだけでなく、いくつかの語形を比較する形で、命令の強弱、相手への持ちかけの度合いなどのニュアンスを尋ねればよかったという反省もある。

本稿では「大阪方言」として限定して述べてきたが、大阪内の地域差、京都方言・神戸方言などとの関わりも詳しく調べる必要があるだろう。筆者の個人的興味としては、文末助詞

イサの問題がある。榎垣1946で「なんやいサ」「あらへんやんかいサ」が挙げられているが「今は余り使はなくなった」とある。その9年後の榎垣1955では、文末助詞イサについて「現在京都ではあまり使わないようだが、京都の南効八幡とか山崎とか、大阪府と接したあたりで盛んに使っている」「イサはもう田舎言葉と感じられているのだ」とある。しかし、遠藤邦基1982には京都方言の命令法の一つとしてタベーサ（食べる）が挙げてある。また、田辺1985に大阪出身の筆者がこどものころに「何か咎め立てされると、『知らんやんかいさ！ウチ！』などと言いつ返し」ていたとあるので、大阪中心部でも使われていたと考えられる。現在でも、身の回りでイサを耳にすることがあるが（命令表現に使われているものもそうでないものも含めて）、大阪方言なのか、京都方言なのか、命令表現にどの程度使われているのか。現在の実態はどのようなのであろうか。

もう一つ、今回は「選択式質問調査」で「読む」という五段動詞を扱ったが、今後、一段動詞のバリエーションも調べる必要がある。和田1961に「青年男子には上一段動詞の命令形にエ列音のが生じた」とあり、「起きろ」をオキ^ーではなく、オケ^ー、「見ろ」をミ^ーではなくメ^ーという例が挙げてある。国立国語研究所1991『方言文法全国地図2』を見ると、「起きろ」の場合は、大阪の真ん中に1例のみ、オキ^ーと併用でオケ^ーがある。しかし「見ろ」については、メ^ーはない。国立国語研究所1991の話者は1925年以前に生まれた男性であり、和田1961の「青年」はそれよりも若いと思われるが、現在の実態はどのようなのか。

いずれも、今後の課題としたい。

参考文献

- 榎垣実1946『京言葉』高桐書院
榎垣実1955「近畿方言の文末助詞『サ』」『近畿方言』20
榎垣実1963「音調差異とその法則—京都市方言を例として—」『国語研究』15号
遠藤邦基1982「京都府の方言」『講座方言学7 近畿地方の方言』国書刊行会
木川行央1991「方言にあらわれた男女差—西日本方言（関西）」
『国文学解釈と鑑賞』第56巻7号
清瀬良一1957「神戸方言の文末助詞」『方言研究年報』第一巻
郡史郎1997「I 総論」「II 府内各地の方言」『大阪府のこぼれ』明治書院
国立国語研究所1991「方言文法全国地図2」
島田勇雄1944「大阪方言の命令法」『方言研究』10号
（『日本列島方言叢書16近畿方言考④（大阪府・奈良県）』ゆまに書房1996所収）
田辺聖子1985『大阪弁おもしろ草子』講談社
前田勇1949『大阪弁の研究』朝日新聞社
前田勇1961『大阪弁入門』朝日新聞社
村中淑子・郡史郎1990「文末詞『カ』の音調の機能における大阪語と京都語の差」
『方言音調の諸相—西日本—(1)』重点領域研究『日本語音声』A3班研究成果報告書
村中淑子2000「『辞書の告知』における待遇表現の実態—表現意図による会話作成調査の結果より—」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第13号

- 村中淑子2001「一連の会話における『意思告知』『断り』『依頼』の表現—東大阪市における
会話作成調査より②—」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第14号
- 山本俊治1955「大阪方言における文末助詞『ナ』」「東條操先生古稀祝賀論文集（近畿方言双
書第一冊）」近畿方言学会編
- 山本俊治1957「大阪方言における文末助詞」『方言研究年報』第一巻
- 山本俊治1961「大阪方言—その分布と区画—」『武庫川女子大学紀要人文科学篇』8号
（『日本列島方言叢書16近畿方言考④（大阪府・奈良県）』ゆまに書房1996所収）
- 山本俊治1962「大阪府方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 山本俊治1965「女子学生の方言意識とその実態（2）—大阪方言を素材として—」
『武庫川女子大学紀要人文科学篇』12号（『日本列島方言叢書16近畿方言考④（大阪府・
奈良県）』ゆまに書房1996所収）
- 山本俊治1982「大阪府の方言」『講座方言学7 近畿地方の方言』国書刊行会
- 和田実1961「方言の実態と共通語課の問題点3 大阪」
『方言学講座第三巻西部方言』東京堂

付記

本稿のもととなった調査は、東大阪市から地域研究助成金を受け、「東大阪市における方言の世代差の実態に関する調査研究」の課題でおこなった共同研究（研究代表者・大阪樟蔭女子大学助教授 田原広史、研究分担者 村中淑子、1997年度～1998年度）によるものである。ただし、論文内容についての責任は村中に帰するものである。

53名の話者の方々、および話者の紹介の労をとってくださった方々に、心よりお礼申し上げます。調査員として活躍してくれた大阪樟蔭女子大学田原ゼミ2回生（1998年9月当時）および同大学卒業生の中上愛氏にも感謝する。当時、徳島大学の同僚であった堤和博氏には、調査票作成段階で大阪方言話者としてのご意見を伺い、また話者の紹介もしていただいた。記して謝す。

【表1】 それぞれの語形を使用するかどうかの回答一覧

性別	年齢	ヨメ	ヨミ	ヨミヤ	ヨミー	ナ	ヨミーヤ	ヨミンカ	ヨマンカ	ヨマンカイ	ヨマンカイナ	ヨマンカイヤ	ヨミヤガレ	ヨミサラセ	ヨミクサレ	ヨミナハレ	ヨミナサイ	ヨンヂ クレハレ ヘンカ
男	70		0	0														
男	66		0	2	2	2	0			4					3			3
男	63	2	0		2	2			0									3
男	60	2	0	0	2	2			4	4	4			3				3 3 6
男	59				2			3		4								3
男	59					2	0		4									3 3 6
男	57	2	0	0	2	2	4		4	4	4			3	3	3		3 3 6
男	57	2		0				0		4								3 3 6
男	55	2		0				4	4	4				3		3		
男	52	2,0	0	0	2	2			4									3
男	50		0		2													3
男	49			0		2				4								3
男	46		0	0	2	2			4	4	4				3			6
男	42	2	0	0,2	2	2	0		4	4	4							3 3 6
男	40	2	0	0	2	2	4		4	4	4			4	4	4		3 3 6
男	39	2	0	0	2	2	0		4	4	4							3 3 6
男	36	2	0	0	2	2	0		4	4	4							3 3 6
男	33	0	0	0	2	2	4		4	4								3 3
男	32	2	0	0				4	4									3
男	31	2	0		2	2					4							3
男	31	2		0	2	2				4								3
男	30	2	0	0	2	2			4									3
男	26	2		0					4	4								3 3
女	75				2		0			4								3
女	73			0			0											
女	66				2		0											3 3 6
女	62				2		0			4								3 3
女	58		0	0	2		0		0	4								3 3 6
女	54		0		2													3
女	52		0	0	2					4								3 6
女	52			0		2	0			4								3 6
女	51		0	0	2					4								3 3 6
女	51		0	0	2		0			4								3 3 6
女	51		0	0		2												3
女	50		0		2													3
女	49		0	0	2	2				4	4							3 3
女	46			0		2				4								3 3
女	46			0	2				0	4								
女	38		0		2	2												3
女	38		0	0		2				4								3
女	36			0		2				4								3 3 6
女	34		0	0	2	2	0		0	4								3
女	34		0	0		2				4								3
女	34		0		2	2												
女	33		0		2	2				4								3 3
女	31		0	0	2	2				4								3
女	31			0	2					4								3
女	30		0	0														3
女	28	0	0	0	2	2				4								3 6
女	26			0	2	2			4	4								
女	23				2	2												
女	21	0	0	0					0									3
女	21	0	0	0	2	2				4								3 6

【表2】 「夕食を食べていくように勤める」発話

性別	年齢	命令形	通用形	通用形	通用形	テ	テ+	テ+	タラ+タラ+	否定疑問	肯定疑問	WH疑問	その他
		+ヤ	+ヤ	+イナ	+イヤ	ヤ	イヤ	イナ	疑問願 断定	(力無)			
男	70								●				
男	65		●										
男	63		●●										
男	60			●									
男	59		●										
男	59		●										
男	57		●					●					
男	57			●									
男	55	●											
男	62								●				
男	50						●						
男	49									●			
男	46								●				
男	42	●●											
男	40			●									
男	39							●					
男	36			●									
男	33			●									
男	32							●					
男	31			●									
男	31			●									
男	30			●									
男	25		●					●					
女	75			●									
女	73			●									●
女	66			●									
女	62								●				
女	58									●			
女	54										●		
女	52			●									
女	52								●				
女	51								●				
女	51			●									
女	51										●		
女	50								●				
女	49							●					
女	46							●					
女	46							●					
女	38							●					
女	38						●						
女	36								●				
女	34									●			
女	34						●						
女	34						●						
女	33												●
女	31												
女	31		●										
女	30												
女	28							●					
女	26									●			
女	23												
女	21									●			
女	21								●				